

# 不毛な研究延長へ布石

## 制御できないう核にこだわる 愚かしさから地域は脱却を



幌延深地層研究センターの展望台から見た立坑の建屋。新たに500メートルまで坑道を掘削する場合、現在より厳しい地下環境での試験になるため、災害や事故の危険性が増し、研究の長期化は必至だ。「28年度末の研究終了」の約束は再び反故にされかねない

日本原子力研究開発機構(以下原子力機構)は、幌延深地層研究センターの坑道を500メートルまで掘削する方針を固め4月6日、北海道と幌延町に伝えた。しかし、新たな掘削とその後の地層処分研究が約束の「2028年度末に終了できるかどうかは不透明であり、厳しさを増す地下環境の中での事故や災害の発生も危惧される。長きにわたり酪農の町に核のゴミ関連施設が立地し続けることで、後志管内寿都町と神恵内村で進む最終処分地の選定に向けた「文献調査」の行方にも影響を与えるだろう。原子力機構の提案を受けた道は「確認会議」を開いて議論する方針だが、研究期間の再延長に道を開いてはならない。確認書を交わすことも含め毅然と対応すべきだ。(ルポライター・滝川康治)

時計の針を一昨年8月まで戻そう。原子力機構は、当初計画では200

の「確認会議」を開き、研究延長を容認していった。

鈴木直道知事は昨年1月、原子力機構の児玉敏雄理事長との会談を踏まえ、6項目の「回答書」を提出。道は「28年度末までの」9年間を通じて必要な成果を得て研究を終了できるように取り組むこと」を求め、機構側も了承している。

だが、半年余りで状況は一転する。「確認会議」の場で機構側が「500メートル掘削」の設計業務を外部委託する旨を表明した。機構が示した20年度の「研究計画」に、この掘削案について具体的な記述はない。ほぼりが冷めるころに次の一手をという、ずる賢いやり方だった。

予算上の制約もあり一時は500メートル掘削にあきらめムードも漂った原子力機構だが、昨年来の寿都町と神恵内村での最終処分地選定に向けた「文献調査」の着手が、計画の具体化を後押しした形だ。

鈴木知事が「延長容認」を表明したころ、筆者はこう記している(20年2月号を参照)。「今後も処分候補地に名乗りを上げる自治体は、簡単に現れそうにない。最終処分に向けたスケジュールは先



地下の調査坑道を見学する幌延町や周辺町村の住民たち。調査中に地下水やガスが噴出するたびに論議を呼んだ(2014年3月撮影)

送りされ、それに引きずられる形で幌延での処分研究が継続されていく

……。火種はくすぶり続ける「それから1年余り。道民にとつては「処分地の選定調査」と「再延長含みの処分研究の継続」という難題に直面することになった。

### 掘削や研究が長引き再延長も泥沼に嵌まらぬ対応策を示せ

前出の知事と機構理事長との合意内容には曖昧さが残る。まず、28年度末までの研究終了は「必要な成果」を得て取り組むことが前提だ。裏説みると、そうした成果が得られな

い場合は再延長できるとも解釈できる。研究終了後の「埋め戻し」についても全く言及がない。8年後の状況によつては、漫然と処分研究が続く事態もあり得るのだ。

機構側の掘削提案を受け道と幌延町は「確認会議」を開き、研究期間内に終了できるかどうか議論する予定という。だが、「確認会議」は協定の履行状況をチェックするために設置された機関である。新たな計画案を検討し、その是非を判断していくやり方は本来の設置目的から逸脱するのではないか。

また、道民の意思を反映させる手段は、「質問」を募集し、それを「確認会議」の場でまとめて機構に質すことを想定しているだけである。今後、「確認会議」に先立ち道民向け説明会を開催するなど道民が参加できる方策を講じるべきだ。「500メートル掘削」によつて、以下の問題点が予測・危惧される。

- ① 研究の長期化が避けられず、研究期間の再延長につながる
- ② より厳しい環境下での試験による災害や事故(漏水やガスの湧出、労働災害、坑道の損傷など)の危険性が高まる

③ 幌延の坑道を最終処分場にすることは出来ないが、海岸線に近い周辺地域は処分候補地になり得る

④ 交付金などにより政府・機構に対する幌延町の依存度が高まる

⑤ いずれ日本でも地層処分をやる」との虚構を糊塗する「デモンス・トレーション施設として、幌延町に居座ることになりかねない

⑥ 寿都町や神恵内村での「文献調査」問題などと併せ、北海道が長く核の「ゴミ」の最終処分地として狙われ続ける

そうした泥沼に足を突っ込まないためにも、道は機構との間で「28年度末までに一連の研究を終了する」との確認書を交わすべきだ。

鈴木知事や道の担当者からは「北海道には道外からの核の「ゴミ」を断固として受け入れない。泊原発の使用済み核燃料は道内で厳重に保管することの毅然とした姿勢が伝わっていない。政治信条や支持政党などに関係なく、「原子力開発の負の遺産」である高レベル放射性廃棄物や使用済み核燃料の後始末をどうするか?」を北海道で暮らす者すべてが真剣に考えてほしい、と願う。

(4月6日現在)

深地層研究の推進に期待する幌延町長・野々村仁さんに訊く

# 地層処分に疑念あっても研究を掘削などの是非は住民の判断で

住民サービスへの波及効果も安全性を担保し研究の継続を

——幌延町は深地層研究に対し、どう臨んでこられたのですか。

野々村 日本はどこかで最終処分をしなければならぬ時に、安全性はどうなのか、実際に掘ってみて事

故なく安全に埋められるか、きちんと検証しなければなりません。その施設のひとつであり、研究自体は進めるべきだ、と思っています。

——立地を受け入れ、地域振興などにどんな波及効果がありましたか。

野々村 産業振興などで派手なことはしていません。ただ、健康面や



(のむら・ひとし)1955年、幌延町生まれ。73年に名寄農業高校を卒業後、実家に戻って酪農一筋に歩む。2003年、幌延町議会議員に初当選。14年、町議3期目の半ばで町長選に初当選し、現在に至る

子育てを含めた住民サービスを充実させてきた。24時間救急対応で町立病院を維持し、消防体制も磐石にして手厚く対応してきました。(深地層研究センターの)波及効果もあり、きちんと手当てが来ています。

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

——「科学的特性マップ」では、幌延を含む海岸線沿いを処分場の適地として色分けし、道条例があるとして除外なく候補地になり得る、としています。寿都と神恵内は、そのとおりになっている。町内の海岸線に近いところを候補地に挙げるような動きが出てきたら、断固として拒否することになりますね。

野々村 「信用しない」と言われるとそれまでですが、わたしたちは最初から「幌延町を」処分場にしない」と言っています。議会制民主主義によって首長が交代し、原子力政策を進めていた人も変わっていく。「条例なんて」と言う人もいますが、この地域の法律だと思っています。町内にも賛成派と反対派がいたけれど、「こ

子育てを含めた住民サービスを充実させてきた。24時間救急対応で町立病院を維持し、消防体制も磐石にして手厚く対応してきました。(深地層研究センターの)波及効果もあり、きちんと手当てが来ています。

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

——町議会の議長時代、原子力機構に対して「500メートル掘削を要請していましたね。

野々村 当初計画の中に「500

事は「28年度末で終わりにしよう」と原子力機構の理事長に要請し、先方も了承しています。

野々村 「いつまでも(研究を)延ばせ」なんて言いません。「成果が出たら(坑道に)蓋をしよう」ということは皆が理解しています。

——道と原子力機構との合意を守ってもらうことが基本です。今後、町として「28年度末終了の順守」を機構や政府に求めていく意思は?

野々村 わたしも知事と同じで、必要な成果が得られたら終わりにすればいい。ただ、この地殻変動がある日本では何が起きるか分かりません。数字上で「ここで終わり」という研究に何が意味があるのか、クエスチョンだと思います。

——仮に「28年度末」から5年、10年と再延長され、「あれも調べたい」となっても、「約束だから守ってもら

必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。



役場前に設置された幌延町の基本姿勢をアピールする看板

「必要なら掘削すべきじゃないか」というのが、わたしの考えです。何もしないで「地下(での処分)は駄目」と言うより研究で実証していく、と震度4〜5の時に(地盤が)どれだけの強度があるのかを調べることも実験のひとつと思う。

「核廃棄物施設誘致に反対する道北連絡協議会」代表の久世重嗣さんに訊く

# 「処分研究」めぐるって残るしこり 一次産業を基盤に地域づくりを

「20年程度」反故に募る不信感  
科学技術に対する信頼も失墜

「500メートル掘削」に対する受け止め方は？

久世 原子力機構は過去の住民説明会の中で「350メートルまでの情報で対応できるから、あえて50



(くせ・しげつぐ)1944年、岡山県生まれ。関西学院大を卒業後、生協の共同購入活動などに携わる。安全な食べものを求め、兵庫県内で農業に従事し、1989年に宗谷管内豊富町へ移住。酪農をメインにした有畜複合経営を続け、2000年に仲間たちと衛生工房レディエを設立してチーズなどの製造・販売に携わる。現在、同工房の会長

0メートルまで掘削する必要はない」と言っていました。近年は話にもならず、僕は一度終わった計画だと理解していたのです。

機構側の対応を振り返ると、研究成果について深く考えずに進めてきて、「研究開始から」20年がひとつの節目になる」と捉えていた。とこ

ろが、政府内では核のゴミ「処分場を造る上で、研究施設がないと見える化」できない、となった。それが延長の一番の理由であって、500メートル掘削の話は後付けの理屈だと理解しています。

基盤研究が終わらず「20年程度」の約束で始めた研究期間が延長されたことに対する不信感がある。基盤研究が終わり、「これで地層処分について」と処分場の建設に向かうのが普通の流れです。しかし、すべてが後付けになり、それが出来ない体質を持つってしまった。今回の「文献調査」の問題でも、後でいろいろんことを持ち出し、あたかも地層処分が出来るような形にしていって、一番科学的でない体質になっている。

「今の政治・行政の実態を反映しているような…苦笑。」

久世 政治ならまだ話は分かりませんが、それを研究でやると科学が死んでしまう。科学技術に対する信頼性がないことは致命的であり、不信感が増幅する結果になるからです。

道や機構に真摯な対応を求め掘削による影響に危惧の声も

「500メートル掘削問題について、道北連絡協議会の対応は？」

久世 道が原子力機構からいつ、どのような形で（掘削について）知ったのか曖昧にしているので、今年1月、公開質問状を出しました。この間の経緯について、道もきちんと検

証していないので、当初の研究内容まで遡って点検してほしい。

500メートル掘削は新たな問題だと僕は認識しています。（三者協定が守られているかをチェックする「確認会議」で検討できる問題ではなく、道は組織としての体を成していません。そこが一番大きな矛盾です。この問題に対する道の曖昧な姿勢は、寿都と神恵内での「文献調査」の呼び水になりました。単に「道条例があるから…」ではなく、核のゴミ「問題に対する道のスタンスをはっきり示してほしい。」

「昨年11月、原子力機構に「中止」の申し入れをしています。」

久世 参加した「豊富町民の会」の代表が、「豊富に来て、この問題の経緯を住民に説明してほしい」と要請しました。その後、何度か折衝していますが、具体的な日程は未定です。先方は「コロナが…」とか言い訳をしており、次の「確認会議」後になる可能性もある。せめぎ合いながら、折衝を継続中です。

「新聞報道によると、掘削による影響への懸念が出たそうですね。」

久世 500メートルまで掘っていくと（従来とは）違う地層になり、

明らかに危険な領域に入っていく。また、豊富温泉の源泉は深さ千メートルほどですから、地下水の流れがどう影響するか危惧しています。掘削工事中に作業員が事故に遭う危険性もある。そうした面についても説明してほしい、と要請しています。

幌延と周辺町村の間に残る溝  
次の世代の地域づくりに期待

「深地層研究センターに対する、周辺町村や住民の受け止め方は？」

久世 例えば農業関係者との間に不信感があります。幌延農協と北宗谷農協との合併は、核関連施設の誘致問題をめぐるしこりが残り、なかなか進みません。稚内と豊富の農協はすでに合併しており、地域のあり方にとってマイナス材料です。

幌延町に深地層関連の交付金などが入った結果、すごい農業が実現したかというところ、そもそもありません。基幹部門に対する手当てが出来ていないんじゃないか。うちのチーズ工房では、乳製品の製造・販売をやってきましたが、幌延の酪農関係者の間にはそうした機運が育っていません。あらためて、地域の将来にとって核の関連施設がある方がいいの

かどうか、よく考えてほしい。

「協議会では各地の首長にも要請を続けていますね。」

久世 周辺の町村長と話をしても、そこ（幌延町との関係）は奥歯に物が挟まったような言い方になる。「あれがねえ…」と（笑）。普通はお金が入り、（機構関連の）人口も増えたのだから、「良かったね」となるけれど、そうはなっていません。

「幌延に交付金などが落ちるといつても、原発マネーとは桁が違う。」

久世 幌延には雪印の工場があるし、良い材料はそろっているのに活



研究期間の延長問題をめぐり、鈴木知事に面会を求める道北連絡協議会や市民団体の人たち(19年11月27日撮影。左端が久世さん)

用できていません。ふるさと納税だって、自分たちでやれば10億円集まる。基幹産業が成り立てば、すぐに取り返せるようになるのです。

「一次産業を軸にした地域づくりと処分研究は相容れない、と。」

久世 核は制御出来ないことが常識になっていくのに、しがみついているのかしよとするのは、全く逆の捉え方ではないでしょうか。地域の一次産業を基盤にして、自分たちの生活に自然環境や空気が、水をどう取り込んでいくか——その時に科学や技術を使っていくといい。自然環境を生かし、次の世代が出ていかなくても済む地域を創ることが大切です。

北海道は一次産業が基盤でしたが、今までは使い方が悪く都府県の植民地だった。そうではなく、地域の中で生産されたものを食べたり、加工して生活する世界を実現していく。こうした横の関係を創る時、幌延の問題は小さなトゲが刺さった感じがする。若い人たちが垣根を超えた関係を持ちながら、自分たちが「住んで良かったな」という形を創りたい。その時、自分たちで「幌延に研究所があつていいか」を判断してほしい。

(3月25日、豊富町内で収録)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。